



小さなたねの物語が描かれたステンドグラス (ガラスアート TAKAMI 製作・寄贈)

今年に入ってから記録的な寒波は、各地に大雪をもたらし、私たちの生活に様々な影響を与えています。そうした中で、インフルエンザウイルスが猛威を振るい、国内の罹患者が過去最多で100万人を超えたと言われています。小さなたねも新年早々「休所」を余儀なくされ、利用者の皆さまにご迷惑とご心配をおかけしたこと、深くお詫び申し上げます。

「リスクマネジメント」(危機管理) という言葉があります。将来起こりうるリスクを想定し、それが起こった場合の損害を最小限に抑える対応のことですが、元々はアメリカで保険の理論として派生した言葉だそうです。今やこうした考え方は、様々な場面や場所でも取り上げられるようになってきました。また、欧米の理論を持ちだすまでもなく、「備えあれば憂いなし」という、この国が古来からの伝え続けてきた「諺」の中に、現代を歩む知恵

たねスタッフのつぶやき

今年は何所以来の事件が立て続け幕開けに。まずは停電。ヒューズが飛び、ブレーカーが落ちたのは初だそう。次に学級閉鎖ならぬ、たね閉鎖。インフルエンザB型の猛威に倒れたスタッフ4名、利用者様2名……。多くの皆様にも多大なご迷惑をおかけした。熱のない私は、念のための受診が、思わぬ1週間の出勤停止。「たねの子ども達は抵抗力が弱いんだからね」と後藤先生。さらに「水野さんの悩みのたねを増やしたらいかんや」と。愛のあるお言葉に、ジーン……



井上明子 (看護師)

リスクマネジメント



鬼がやってきたぞー!!

があるとも言えます。大切なことは、そうした事柄に関わっている「人」(当事者)が、その先に起こりうるリスクを想定し、どのように備えていくのかに尽きるとも言えます。

札幌市の火災事故で11人が亡くなった共同住宅では、生活困難者が肩を寄せ合って暮らしていたと言います。スプリングラー設置が無かったことや無届施設 などといったことが大きく取り上げられています。施設形態や設備を問題視する前に、そこで暮す一人一人が、どうしてそのような状況に置かれてなければならなかったのか、そこに社会全体の危機管理能力が問われているのだと感じます。一つ一つの「憂い」を繰り返さないためにどうすべきであったのか、私たち自身もまたしっかりと考えなければならぬと思います。



医療法人にのさかクリニック
 地域生活ケアセンター 小さなたね

〒814-0172 福岡市早良区梅林 6-23-3
 電話 092-874-3051 FAX 092-874-3052
 E-mail: chisanatane@tune.ocn.ne.jp

後記
 私は指笛が吹ける。子どもの頃はどの指でも1本でも吹けた。友人たちと広い田んぼを挟んで交信しようと練習した成果だ。ただし計画は叶わなかった。私しか習得できなかったからだ。その指笛を小6娘に教えると、すぐに音を出したので驚いた。娘が5歳の頃、私が家事を理由に遊びをやめると、「ママがママでなくて友達で、隣に住んでいたらもっと遊べるのにね」と残念がったことがある。もし娘が私の友達だったら、あとき田んぼを挟んで交信していたのかなと思って、不思議な気持ちになった。さあ来月は卒業式。(E)

所長 水野 英尚

本来の「自立支援」とは？

「SDGs」(エス・ディー・シーズ)という言葉をご存じでしょうか。Sustainable Development Goals(持続可能な開発目標)のそれぞれの頭文字を取った略称です。

2年前、国連副事務総長のアミナ・モハメッド氏が、「地球は私たち人間なしでも持続できますが、私たちは地球なしでは持続できません。先に消えるのは私たちなのです」と語り、この年の国連では、環境や人権、開発、平和などこれまで取り組んできた課題をまとめて、193か国の加盟国が全会一致で、「我々の世界を変革する…持続可能な2030アジェンダ」として17分野の目標を採択したのです。その前文には「我々は、地球を救う機会を持つ最後の世代になるかもしれない」と記され、第1に「貧困をなくそう」、「そして2番目に「飢餓をゼロに」、さらに「すべての人に健康と福祉を」と続いています。こうした目標を「持続可能」なものにしていくためには、一部の人の特別な事柄として捉えることなく、一人一人の生活に関連した私たちの課題であるという「自覚」が必要でしょう。

しかし、そうした世界規模の目標でなくとも、暮らしの中では持続しなければならないことは山とあり、毎日の繰り返しが生生活というものです。ところが、障がいをもつ方やその家族にとっては、安定した日々を繰り返すことがままならないことが多々あります。体調の不安定さ、経済的な自立の課題、介助者の高齢化等々、持続を脅かす状況と常に隣り合わせです。「地域で暮らす」という極めて当たり前のことでさえ、持続不可能ということになりかねないのです。各々のライフステージに合わせ、持続可能な支援の仕組みを創り出すことが大切だと思います。

団塊の世代(約800万人)が75歳以上となる、2025年問題」を前にして、国は「地域包括ケアシステム」や「医療と介護の連携」などを打ち出しています。また、次年度(平成30年度)から医療や介護のダブル報酬改定もまた、今後の方向性を指し示す大切な指針となっていきます。そこで一際目立ったのは、「自立支援」を促す仕組みが随所に入り、これまでリハビリ目的のサービスにあった「成功報酬」を、介護サービスへ導入したということでしょう。つまり、食事や排せつや着替えなどの身体能力評価について、一人でできれば10点、何らかの手助けが必要

障がいをもつ方々と共に

私は筋金入りの利用者さんファンです。お一人お一人の個性に違いはあるけれど、その溢れる癒しオーラ、その眼の奥に秘めたパワー、屈託のない笑顔、伝わってくる優しい空気感……それは皆さんに多かれ少なかれ共通するのように感じます。どれを取ってもたまらなく愛おしく、一緒にいてとても楽しいです。

ある時、とても不思議な話を耳にします。「人生は一冊の問題集」……私達が暮らすこの地上は、魂修行の場として作られた世界だと。私達の本当の姿は肉体の中に宿る魂で、天国から地上に肉体を持って降りる時、自ら人生の計画を立てる。どこに生まれ、どんな子供時代を過ごす、どんな学校に行き、どこに就職、誰と結婚し子供を授かる、どんな怪我や病を負い、離婚、倒産などの経験をする、どんな形で人生の幕を閉じる……などなど。障がい者の方も例外なく、ご自身で障がいと共に生きる人生を選ぶのだといいます。そして、自身を支えてくれる両親を選び「大変な人生になりますが、よろしくお願ひします」と誓いを交わし、決意を持って生まれてくるのだと……。「障がい者は社会的に弱い立場」と思われがちですが、そうではなく、むしろその不自由な人生を自ら選択できる勇氣ある強い魂の持ち主だと知った瞬間です。障がいをお持ちの方に大きな魅力を感じるのは、その精神性の高さ、志からだったのかも知れません。

このたび、3月をもって退職することになりました。小さなたねの皆さんとのお別れは大変寂しく辛いですが、この先も勉強し経験や技術を重ね、何らかの形で障がいをお持ちの方と共に歩める自分へと成長を続けたいと思います。短い間でしたが、とても貴重な時間を過ごさせていただき、心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

また会おうね



小さなたねのクリスマス&餅つき大会 2017

昨年の12月23日(土)、毎年恒例のクリスマス&餅つき大会が行われました。

蒸し上がったホカホカの餅米が石臼に投入されると、「ヨイショ!ヨイショ!」と威勢の良い掛け声が飛び交います。つき上がったお餅を丸めるのは、ボランティアグループ「手と手」の皆さんです。



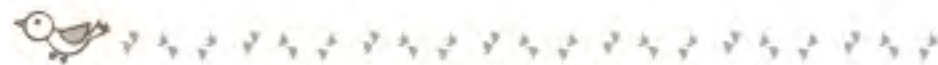
室内ではクリスマス会として、マジックみちゃんによるバルーンアート、オカリナグループひまわりの演奏、たねスタッフのわんぱく相撲やハンドベル演奏、みんなでジャンケン大会をして盛り上がりました。ボランティアとして純真学園大学の学生さん、ご協力して頂いたすべての皆様、本当にありがとうございました。



ビューティーフェスタ in 小さなたね



天神でビューティーサロンを営む吉村さんが、お母さんたちや利用者さんたちのための「たねサロン」を開いてくれました。
美しくなったたねの女性たちにより、一際華やいだ一日となりました。



新スタッフ紹介



西本 昭子
(看護師)

今年の1月から小さなたねに入職しました西本昭子です。看護師としてこども病院に11年、2児の出産後、老人保健施設で5年、福岡山王病院で4年勤務した後、今回小さなたねとご縁があり、勤務することになりました。初めての分野ですので、分からないことも多いのですが、よろしくお願いいたします。



なら5点というように点数をつけ、利用開始時と6カ月後の状況により、合計点数が上がっていれば、その成功に対する報酬を付けるというものです。確かに予防や改善という視点から、トレーニングや機能訓練などを行い評価することは、重要なことだと言えるでしょう。しかし、期間限定つきの成功評価は、そこから外れていく人たちを生み出します。事業者にとって成功につながる可能性の高い利用者を選びすべし、外れた人たちは置き去りになっていくことが起こる可能性があるのです。

私は以前に、こうした経験をしたことがあります。あるリハビリ施設での出来事です。当時まだ少なかった民間による、障がいのある子どもへのリハビリ施設で、人気もあり、多くの子どもたちがリハビリを受けていました。しかし、診療報酬改定を境に、次々と高齢者の方が機能訓練するため、運動機能回復と筋力増加のための機器が導入され、子どもたちが訓練をしている部屋にまで押し迫ってきました。子ども



どれ一つとして、同じじゃない

たちの療育に熱心なセラピストたちも、志半ばで一人一人と退職していき、やがて子どもたちのリハビリが出来なくなっていました。つまり、機能の改善⇨自立⇨成功報酬という考えは、出来ない人たちを取りこぼしながら押しやってしまうことに繋がってしまわないかという懸念があります。このたびの報酬改定によって、そのようなことが起こらないことを願います。

本来「自立支援」というものは、身体機能の回復や、誰かのお世話にならないことだけを指すということではなく、人としての尊厳が守られつつ、暮らし続けていくことを目的とした、パーソナル支援（個別支援）でなければなりません。「成功」という事柄も十人十色であるということですので、それぞれの人生のステージをしっかり受け止めつつ、個別な成功体験が積み上げられていくことを目指しながら、共に歩むことをしていきたいと思えます。